

同時通訳者による使役的事象構造の把握

石塚浩之

(神戸市外国語大学大学院・外国語学研究科博士課程)

Differences between a source text (ST) and a target text (TT) can be a window to observe simultaneous interpreter's online discourse processing. This study focuses on construction of a causal event structure by an interpreter. Despite of no causal expression in the ST, an interpreter sometimes explicitly expresses causation in the TT. In this study, taking a Japanese (target language) morpheme "sase" as a clue, which explicitly marks a causal relation between participants in a serial event, an event structure constructed as the interpreter's mental representation is explored. The event structure of a causal event can be analysed in terms of force dynamics (Talmy 2000) and causal chain (Croft 1990, 1991). As sources of the event structure, apart from the corresponding ST expression, information from other part of the ST and other cognitive resources such as encyclopaedic knowledge is specified in examples from actual performance.

1. はじめに

同時通訳の訳出記録に含まれる起点テキスト (ST) と目標テキスト (TT) の差異は、通訳者によるオンラインのディスコース理解を観察するための窓となる。本研究は、同時通訳の認知的側面を対象とし、英日同時通訳データを使用し、原発話によってコード化された情報およびそれ以外の情報に基づく通訳者の事象構造の把握を分析する。通訳者の活用する知識の非言語的側面は、Pöchhacker (1993)、Setton (1999) などでも指摘されており、Fillmore (1982/2006)、Johnson-Laird (1983)、Kintsch (1998) らにより主張される非言語的意味表象との関わりについて言及されてきた¹。また船山 (2006)、船山ほか (2005, 2008) および Funayama (2007) には、通訳者による非言語的概念の構築に関するより包括的な捉え方が実証データの検証とともに示されている。発話理解における一般的な事象

ISHIZUKA Hiroyuki, "Construction of a Causal Event Structure by a Simultaneous Interpreter," *Interpreting and Translation Studies*, No.10, 2010. pages 1-20. © by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

構造の把握については、石塚 (2009) においても分析されているが、本稿では特に使役的事象の把握に焦点を当てる。そのため、ST には使役的關係を明示する表現がないにもかかわらず、TT ではこうした表現がなされている例に注目し、TT で使役を表す形態素「させ」を手がかりに通訳者の発話理解を分析する。2 節では、make sure が「させ」の訳出を導いていると判断される例を分析し、認知言語学 (Talmy 2000; Croft 1990, 1991) での使役的事象の記述法に基づき、事象とそこに含まれる参加者の關係を含む事象構造の把握によりこうした訳出が可能となることを説明し、この記述法が発話理解における非コード的情報の取り込みを分析するためにも有効であることを示す。3 節では、同じく「させ」に注目し、こうした事象の構造把握に必要な情報が、訳出対応箇所 ST には含まれていないにもかかわらず、ST の先行部分から取得され、訳出に活用されている例を分析する。4 節では、さらにこうした情報が ST のどこにも含まれないにもかかわらず、通訳者の保有する百科事典的知識などの認知資源を活用し訳出がなされている例を分析する。5 節では、本稿での議論を発話理解に関する先行研究の中に位置づけ、ここから得られる通訳者の意味構築についての示唆をまとめる。最後に結論として、本稿で分析した事象構造が通訳者の発話理解における事象把握の骨格をなしていることを主張する。

2. 使役的事象構造の把握

本稿で使用する同時通訳データは、2005 年のグレンイーグルス G8 サミット終了後のブレア英首相 (当時) によるスピーチとその訳出である²。次の (1) では、G8 諸国によるアフリカ支援が話題となっている。ここでは「身に付けさせ」(J050) と事象参加者の使役的關係を明示する表現が見られる。この ST と TT を比較し、ここでの「させ」の使用に日本語としての違和感を覚える人はどれほどいるだろうか。

(1)

- | | | |
|-------|--|--------------------------------|
| E 048 | it is not enough for us simply to open up our markets, | we also have to make sure that |
| J 048 | 貿易をする能力を高めるということ (が) あります。私たちは市場を開放するだけでは不十分です。 | |
| E 049 | those developing countries have the capacity to make use of those more open markets. | |
| J 049 | 私たちは途上国において、 | これらの 市場をうまく活用する能力を |
| E 050 | And there was also from the African side | likewise a firm and strong |
| J 050 | 身に付けさせなくてはなりません。 で、また、アフリカ側からも発言がありました。アフリカ側 | |

起点言語 (SL) から目標言語 (TL) への内容伝達という点から直感的に判断すれば、この訳出には大きな問題はないように思われる。しかし、あらためて ST と TT の表現を分析すると、この「させ」は make sure (E048) に導かれているように思われるが、「させ」によって示される事象参加者の影響關係は ST の make sure の語彙的意味には含まれていない。また E048 の those developing countries は「途上国において」(J049) と訳出されている。この those developing countries は節の主語であり、通常、「において」と訳出される要素ではな

い。この 2 点において、この訳出には ST と TT の間に表面的な差異が含まれていると言える。ここで問題となるのは、どのような仕組みでこのような訳出がなされるのかということである。本節では、ディスコース処理に伴う意味構築の側面から、これらの問題に取り組む。最初に (1) の TT 表現ならびに ST と TT の発話のタイミングを手がかりに、通訳者によるオンラインのディスコース処理について考察する。

2.1. 事象参加者の把握

ST と TT の時間的な対応関係を見ると、J049 で「私たちは途上国において」は E049 の *those developing countries* の直後に現れている。ST の *we* が主語としての地位にあることから、TT の「私たち」は提題の「は」を伴っている。この時点で、ST からは *we* (E048) が発話の述語に対して果たす意味役割を判断するための情報は得られていないことから、この判断は ST と TT の形式的対応のみによってなされていると言える。一方、*those developing countries* も E048 から始まる *that* 節の先頭にあることから統語的には主語であると判断することはできるが、この部分を「途上国において」と訳出する処理には、形式的対応は認められない。

(2)

- a. 私たちは途上国が
- b. 私たちは途上国において
- c. 私たちは途上国に

ST と TT との形式的対応に基づいた訳出を求めるなら、(2a) のように「私たち」と「途上国」の両方を主語として訳出できる。一方、「身に付けさせ」(J050) との対応の面では、(2c) は自然な表現となるが、この表現の使用は、この訳出の時点で通訳者が「私たち」と「途上国」の使役的關係をあらかじめ把握していることが前提となる。(2b) であれば、「途上国」を主題として取り上げているのみで、「私たち」と「途上国」の關係は特定されない。

ここで ST と TT の形式的な対応を損なう訳出が採用されていることは、通訳者が統語的な情報以外による判断でディスコースを処理していることを示しており、(2a) および (2c) と (2b) の機能的差異を通訳者の訳出態度の反映とみなせば、この訳出によって通訳者は「我々」と「途上国」の關係を規定することを避けようとしていると判断することができる。もしここで通訳者が「我々」と「途上国」の關係を捉えていたならば、その關係を明示する表現を使用することができたであろうし、ここで「身に付けさせ」という表現が予定されていたならば、「させ」とのつながりで不自然さを含む「途上国において」という訳出は選択されなかっただろう。この時点でこの通訳者は「私たち」と「途上国」という二つの実体をとらえているが、まだこれらの關係は把握しておらず、後続する ST からこの關係を探ろうとしているのだと考えられる。この訳出は、通訳者の発話理解においては、事象の構造が一举に把握されるのではな

く、まず事象の参加者の把握があり、それからその参加者同士の関係が理解されるという発展段階があることを示している。

この通訳の原発話はグレンイーグルス G8 サミット終了後のブレア英首相 (当時) によるスピーチであり、この we (E048) は「G8」を指している。通訳者は「G8」と「途上国」に関する背景知識は持っており、さまざまな関係を想定することができるはずである。しかし、この時点ではこの両者に関しどのような関係が語られるかを確定することはできない。つまりディスコースのこの箇所で通訳者は「私たち」と「途上国」という実体をとらえているが、それがどのような事象でどのような役割を果たすのかは把握していない。そのため通訳者はできるだけ意味的な制約の緩やかな表現を採用しながら、これらの実体を参加者とする事象構造を把握するために必要な情報を処理しようとしているのだと解釈できる。つまり、この訳出は、オンラインの意味構築の途上にある通訳者がいったん統語構造に基づく形式的判断を留保しつつ、事象の構造を探っている状態を示していると言える。

(1) より取り出した「途上国において」という訳出 (3a) を、(3b)、(3c) と比較すると、「させ」が要求された動機的一面を確認することができる。

- (3) a. 私たちは、途上国において、これらの市場をうまく活用する能力を身に付けさせなくてはなりません。
- b. 私たちは、途上国において、これらの市場をうまく活用する能力を身に付けなくてはなりません。
- c. 私たちは、途上国において、これらの市場をうまく活用する能力を身に付けることを確実にせねばなりません。

(3b) の「能力を身に付ける」という述語を使用した場合、これに対する動作主は「私たち」となる。ところが、ST では have the capacity (E049) の動作主は those developing countries (E049) であり、we (E048) ではない。また (3c) の場合、「能力を身に付ける」の動作主として「途上国」を指すと主張できなくはないが、動作主が「私たち」と解釈される可能性を排除することはできない。したがって、(3b)、(3c) では ST で示された事象を適切に伝達できない。一方、(3a) の場合、「途上国において...身に付けさせ」という表現は、日本語の規範的文法に則った表現ではないものの、「能力を身に付ける」の動作主が「途上国」であるという点に関しては誤解の余地がない。したがって、(3a) の訳出は、ST の述語と動作主の関係を TT において正しく表現していると言える。

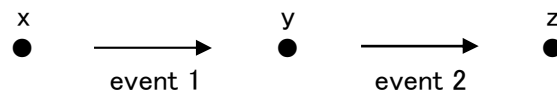
しかし、述語と動作主の対応関係のみでは、ここで「させ」が使用された動機を十分に説明することはできない。「途上国」を「身に付ける」に割り当て、述語と動作主の対応という機能的側面を調整することだけが目的であれば、「身に付けさせ」ではなく「身に付けてもらう」という表現を使用しても構わない。ここでの「させ」の使用を説明するためには、通訳者の意味構築の内実についてのより具体的な説明が必要である。以下ではディスコースにおける使役的事象構造を分析するため、認知言語学の因果連鎖 (Croft 1990, 1991) および力動性

(Talmy 2000) の考え方を導入し、続いて ST および TT から原発話者と通訳者の事象構造の把握について分析を行う。

2.2. 使役の事象構造

言語によって表現される使役的事象は、一般に連続する二つの事象からなる統合事象とみなすことができる。Croft (1990) は、この統合事象の表示に関する議論を、「事象が事象を引き起こす」、「実体が事象を引き起こす」、「実体が実体に作用する」という 3 通りにまとめ、このうち 3 番目の実体同士の関係を因果連鎖 (causal chain) の中で捉える分析方法の利点を主張する。さらに Croft (1991) は、使役的事象の構造を一般化し、以下の因果連鎖の図で表示することを提案している。

(4)



(Croft 1991: 163)

この図において、事象は矢印で示され、事象の参加者は結節点に位置する黒丸として示される。ここで x、y、z は参加者を表し、event 1 において動作主 x の対象であり終点に位置する y は、event 2 においては始点の位置を占め動作主となっている。また図中の矢印は、この因果連鎖における力動性 (Talmy 2000) 、すなわち力の伝達方向を示し、event 1 の動作主 x から y への影響力が y を動作主とする event 2 の原因となっている。この力動性は、使役的事象一般に働く実体から実体への影響力であり、この力には、物理的力のみでなく、心理的、社会的な力も含まれる。

Croft (1991) は、使役関係を (4) で表示することの利点として、以下の 2 点を明示可能であることを挙げる。

- (5) 1. ある事象の終点にある個体が次の事象の始点となる。
2. 因果連鎖にある事象の参加者には順序の関係がある。

この方法により、因果関係にあるが共通の項 (実体) を含まない事象を排除することができるため、因果連鎖に制約を課すことができる。

Talmy (2000) の力動性は、言語表現の文法的な意味分析のために用意された考え方であるが、本稿ではこれをディスコース処理の分析に応用する。また、ここで示された因果連鎖も、言語表現にコード化された事象と参加者の関係を示すものである。Croft (1990, 1991) の議論は、動詞を中心とする言語表現の意味構造の分析にあるため、個々の事象を下位の原子的事象に分解することで、より細密度の高い因果連鎖を表示し、事象の構成と

参加者の役割の関係を明らかにしようとしている。したがって、使役的事象の全体を示す因果連鎖図では、(4) の event 1 および event 2 の内容がより細かく分解され、表示される矢印および結節点の数が (4) よりも多くなる場合が多い。本稿の目的は言語表現のコード的意味の分析ではなく、発話理解の認知的側面の分析にあるため、(4) の記述を採用し、二つ事象から構成される統合事象とそれに関与する参加者の関係を使役の事象構造とみなしたうえで、これをディスコース処理の分析に応用可能であることを示す。

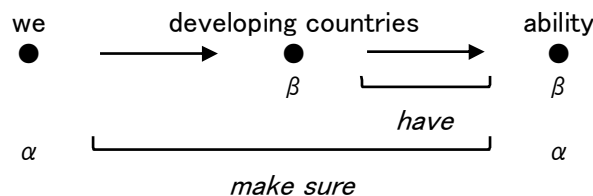
2.3. ST に示された事象構造

発話の聞き手が発話に含まれる言語表現を手がかりに話し手の意図する事象構造の把握を試みる一方、話し手は伝達すべき事象構造を発話に先立って保有しており、それを言語によって表現している。この節では (1) の通訳例から (6) の ST を取り出し、原発話者がこの時点で把握していたと考えられる事象構造について検討する。

(6) We also have to make sure that those developing countries have the capacity to make use of those more open markets.

統語上、この発話には *have* の示す事象と *make sure* の示す事象の二つが表されていることになるが、それらは使役関係にあると言えるのか。この ST は、英国で開催された G8 サミットの閉幕に際しての英ブレア首相 (当時) によるスピーチであり、この箇所では、アフリカ問題に関するサミットでの成果が語られている。スピーチの先行部では、G8 からアフリカへの支援が語られており、ここでも同じ話題が継続している。したがって原発話者により G8 からアフリカへの力動性が把握されていたと言える。この文脈より、G8 を意味する *we* からアフリカを意味する *developing countries* への働きかけを event 1 とし、*developing countries* による *ability* の獲得を event 2 とする二つの事象を共通の参加者である *developing countries* によって連結することができる。したがって、原発話者は、*we*、*developing countries*、*ability* について (7) に示す因果連鎖を把握していたと考えられる。

(7)



(7) において、最上段の因果連鎖図は原発話者の把握していた事象構造を表し、その下の α および β で挟まれた鉤付の線分は ST の言語表現によって表される因果連鎖の範囲を示している。2 つの β で挟まれた線分は、この因果連鎖において *have* によって表される範

圏を示している。これは *developing countries* と *ability* を参加者とする事象である。一方、*make sure* が表すのは *we* を動作主とする事象であり、ここに *we* から *developing countries* への力動性が含まれている。しかし、*make sure* の対象は *that* 節の内容であるため、この因果連鎖において *make sure* によって表現される範囲は、*we* と *developing countries* の関係のみではなく、*that* 節内部の *ability* を参加者とする関係まで含んでいると考えられる。したがって、この *make sure* は、*we*、*developing countries*、*ability* の3者を参加者とする統合事象全体を表していると言える。

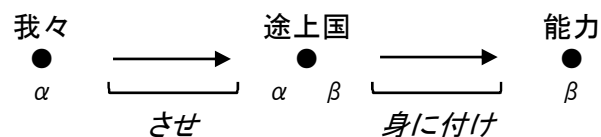
次に通訳者の把握した事象構造を分析する。

2.4. TTに示された事象構造

TTで「私たち」と「途上国」の関係が訳出されるのは、*markets* (E049) の後である。この時点で、通訳者は ST で表される事象とその参加者の関係を把握している。ここでの「させ」の使用は、単に「身に付ける」の動作主が「途上国」であるということだけではなく、「私たち」から「途上国」への力動性とそれに基づく事象の因果関係が、通訳者によって把握されていることを示している。つまり、通訳者は、このディスコースを処理するにあたり、事象における参加者の関係をこの力動性および因果関係を含む構造として把握していたことになる。

(1) の「身に付けさせ」(J050) には使役を意味する「させ」が使用されている。日本語の「させ」による使役構文は、因果連鎖の始点に影響を及ぼす主体を加えるために使われる(大堀 2002)。したがって、この訳出によって表される使役的事象の因果連鎖は (8) として表せる。

(8)



図中の β によって挟まれた線分は「身に付け」によって表される範囲を指し、 α によって挟まれた線分は「させ」により追加された因果関係を表す³。この訳出での「させ」の使用は、通訳者がこの事象における「我々」および「途上国」という参加者とその間に働く力動性を理解していること、すなわち (8) で示される事象の因果連鎖を把握していたことを示している。

(7) と (8) は事象とその参加者の関係に関し、同一の構造を持っている。この二つの事象構造を比較すると (7) で *make sure* として示される要素は (8) で「させ」に対応する要素と部分的に重なる。これが *make sure* (E049) に対応する情報を「させ」(J050) と訳出した動機であると判断できる。また結果として、ST の *make sure* と *have* によって表されていた因果連鎖は TT の「身に付けさせ」によって余すことなく表現されている。このことから (1) の訳出は ST と TT の表面的差異にもかかわらず、原発話者の意図した事象構造を適切に TT に反映していると言える。

ただし、連続的な二つの事象が統合しており、最初の事象が次の事象の原因となるという条件だけでは「させ」の使用が可能となる使役関係とは言えない。ST で *make sure* が使用されているからといって、常に「させ」の使用が可能なのではない。Croft (1990, 1991) の分析では、他動性をもつ表現であれば、すべて使役的事象としてとらえられる。しかし、日本語で使役的事象を意味する「させ」を使用可能とする場合はより限定されている。

たとえば (9) の *made sure* (E029) からは、「させ」の使用を可能とする使役の意味はとらえられないはずであり、実際にこの訳出では「させ」は使用されていない。この ST では *made sure* の主語が *we* (E029) であり、それに続く E030 の *that* 節の主語も同一の実体を指す *we* (E030) であるため、事象の因果連鎖における動作主 *x* と動作主 *y* が一致している。このため、「させ」を使用するための使役的事象を把握することができない状態にある。

(9)

- E 029 bringing finance ministers together on that issue. We also made sure
J 029 ブラウン蔵務相が、蔵務相会議の会議で、G8の蔵務相会議でそのような合意をたたき出す、そのリーダー
- E 030 that we developed specific commitments in relation to the other problems that
J 030 シップをとってくれたことに感謝をいたします。また具体的なコミットメントを作っておくことも必要
- E 031 Africa has, in respect of HIV-Aids for example, as close as possible to universal
J 031 です。その他アフリカにはいろいろな問題があります。例えば、HIV エイズの問題があります。

「させ」の使用が可能となるためには、前提として動作主 *x* と動作主 *y* が異なる実体と捉えられ、動作主 *x* から動作主 *y* への力動性が認められることが必要である。これを (5) に追加し (10) を「させ」の使用を可能とする使役的事象構造把握の必要条件とする。

- (10) 1. 動作主 *x* と動作主 *y* が異なる実体と捉えられる。
2. ある事象の終点にある個体が次の事象の始点となる。
3. 因果連鎖にある事象の参加者には順序の関係がある。

(9) の例が示すように ST での *make sure* の使用が常に TT での「させ」の使用を可能とするわけではない。(10) の条件がそろった場合、通訳者は文脈より力動性をとらえ、参加者を因果連鎖に埋め込み、使役の事象構造を把握することが可能となると考えられる。(1) は、こうした条件が整い、*make sure* を土台として事象の使役の意味が明示的に訳出された例と言える。ST では *that* 節内部の主語の位置にある *those developing countries* (E049) に対する「途上国において」(J049) という訳出からは、実体の把握の後、こうした事象構造が把握されるまでの中間段階を見ることができる。後述するように、使役の事象構造が把握さ

れた場合に必ず「させ」という訳出がなされるわけではないが、使役的事象構造が把握されない場合にこうした訳出がなされることはない。

3. 先行ディスコースからの情報獲得

ここまで、事象と参加者の関係が ST に明示されていないにもかかわらず、通訳者がこの関係を把握したと判断できる例について分析した。(1) では、事象と参加者の関係は示されていないが、参加者となる実体に関する情報は示されていた。「途上国において」の訳出からは、事象の参加者を把握した通訳者が、それらの参加者の事象における位置づけを模索する様子が見えてきた。しかし、ディスコースの処理においては、より不完全な情報から、事象とその参加者の関係を含む構造の把握が実現する場合もある。実際、(7) の条件が整えば、使役関係を明示しない他の ST 表現からも同様の事象構造が把握されることが TT から観察できる。本節および次節では、TL の形態素「させ」を手がかりに他の例を検証し、本稿の考え方でさらに幅広い現象を分析できることを示す。

この節では、TT の訳出には事象参加者の想定を必要とする「させ」という表現があるにもかかわらず、ST の対応箇所には参加者の情報が含まれず、この情報が ST の先行ディスコースから獲得されていると判断される例を分析する。

(11) では、E018 の *motivated by a determination to see a stop to it* が、J019 で「それはやめさせたいという、そういう動機からです」と訳出されている。この *see* にも *stop* にも事象の参加者は明示されていない。したがって、この「させ」に対応する ST には、動作主 *x* と動作主 *y* に対応する実体の関係を示す情報は含まれていない。

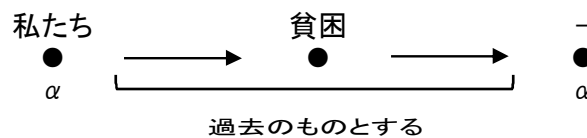
この「させ」の使用から、通訳者の把握した事象構造においては、名詞 *stop* によって示される事象の動作主として、「G8 の指導者」と「アフリカの人々」が割り振られ、因果連鎖に組み込まれていると考えられる。この通訳者の発話理解を分析するためには、先行するディスコースの広い範囲の情報を確認する必要がある。まず「やめさせ」(J019) に割り振られていると考えられる G8 およびアフリカの人々に対応する情報はどこから得られたと考えられるだろうか。E017 に *the thousands of people who die every day preventably in Africa* という表現があり、これが *stop to it* (E019) の *it* の指示内容であると判断できることから、通訳者はこれを情報源として「アフリカの人々」を実体として取り出したと考えることはできる。しかし、ここで表現された「毎日、アフリカで数千人の人々が無用の死を遂げている」という事象の参加者として G8 は含まれない。G8 を指示する表現は *we* (E014) などにもみられるが、ディスコースの流れを合理的に理解するためには、少なくとも E012 の *we* までさかのぼる必要がある。

(11)

- E 012 As I said to you earlier today, we do not simply by this communiqué make poverty history,
J 012 前進を遂げることが出来たと思います。今日もうすでに申し上げたとおり、私たちはこのコミュニケに
- E 013 But we do show how it can be done, and we do signify the political
J 013 より貧困を過去のものとする事は出来ません。しかしどのようにすればそれが出来るかということ、
- E 014 will to do it. The passion that we have brought to
J 014 それは、私たち、共通認識をもっていますし、そのための政治意志も私たちは今日みせました。大きな情
- E 015 this has been echoed by a quite remarkable campaign in all parts of our country, but in all
J 015 熱を以ってこの問題にあたらうとしています。そのためにはまた大きなキャンペーンも行われました。
- E 016 parts of the world also. It has been led with a great deal of dignity
J 016 私たちの国だけではなく世界中であるような大々的なキャンペーンが行われました。それは、大きな
- E 017 and with an enormous compassion and decency for the scandal of the thousands of people
J 017 尊厳をもって行われ、そしてまた、すばらしい、その、思いやりの心と
- E 018 who die every day preventably in Africa, motivated by a determination to see a
J 018 それから、人間的な気持ちを持って行われました。アフリカでは、たくさんの方が日々なくなってい
- E 019 stop to it. About a year ago we established
J 019 くそれはやめさせたいという、そういう動機からです。 およそ一年ほど前、

ST では E012 からアフリカ問題に関する話題が具体化され、make poverty history (E012) という表現が使用される。TT では「私たちは... 貧困を過去のものとする...」(J012) という表現が表れている。この時点で通訳者は (12) の事象構造を把握していたと判断できる。

(12)



この図において、3 つ目の黒丸の上の「-」は参加者の交代がないことを表しており「貧困」に相当する。ここでの話題がアフリカ問題であることから、この poverty が「アフリカにおける貧困問題」を指していることはわかる。したがって、ここで「アフリカ諸国」あるいは「アフリカの人々」をディスコースにおける実体としてとらえ、事象の参加者として認識する条件は整っていたと考えられる。後続する ST において、how it can be done (E013) の it、the

political will to do it (E013) の it、this has been echoed (E015) の this は、いずれもこの make poverty history を指示内容とする。このため、通訳者がこの指示関係を理解していたならば、これらの情報が処理される間は (12) の事象構造に相当する情報が保持されていたはずである。また E015 の a quite remarkable campaign は、この make poverty history を実現するための政治運動を指すため、この campaign の内容を理解するためにも (12) の事象構造の保持がかかわっていると考えられる。さらに E016 の it has been led に現れた it はこの campaign を指示するために使用されている。

TL への訳出を確認すると、how it can be done (E013) の it、the political will to do it (E013) の it は、「それ」(J013)、「それ」(J014) と訳出されており、ここから通訳者の理解内容をうかがうことはできないが、the passion that we have brought to this (E014) の this は「この問題」(J015) と訳出されていることから、通訳者が、この this の指示内容である make poverty history を、ここでの話題である「アフリカ問題」と関連付けて理解していることを確認できる。この「アフリカ問題」は G8 諸国によるアフリカ支援に関する問題であり、(12) で示された事象構造はこの問題の一面として理解できる。また J015 には「そのためには」という ST に直接的な対応表現のない訳語が使用されている。これは通訳者が「キャンペーン」(J015) を「問題」(J015) を解決するための目的としてとらえていることを示している。そして、この「キャンペーン」の主体は G8、「問題」はアフリカの問題であることから、ここでも引き続き G8 がアフリカの貧困を解決するという (12) の事象構造が保持され、訳出に貢献していると言える。

後続する ST では、G8 のキャンペーンに関する発言が続く。E017 の compassion は、G8 からアフリカの人々への同情を指しており、motivated by a determination to see (E018) に含まれる motivated、determination、see はすべて G8 を動作主としており、全体としても G8 を動作主とする事象と判断できる。また scandal (E017) の内容は the thousands of people who die every day preventably in Africa であり、これを a stop to it (E019) の it の指示内容と判断し、この情報に含まれる「アフリカの人々」を事象参加者として把握することが可能となる。ここまでの文脈から、通訳者が「G8」を stop (E019) の動作主 x とし、「アフリカの人々」を動作主 y と設定し、これらを因果連鎖に組み込むことは自然であり、「やめさせ」(J019) という訳出にはこの捉え方が表れている。ここまでの ST からの情報と事象参加者の把握の流れをまとめたものが図 1 である。図中に「ST からの情報」として示した枠には ST の表現がディスコースの流れに従って抜粋されている。右側の枠は、ST の表現から可能となる通訳者による事象参加者の把握を示し、ST の表現と実体をつなぐ線は表現とそれにより可能となる参加者の対応を示している。実体と実体をつなぐ垂直の線は、通訳者による参加者情報の保持を指し、G8 から African に伸びる矢印は通訳者の把握していた力動性を表す。

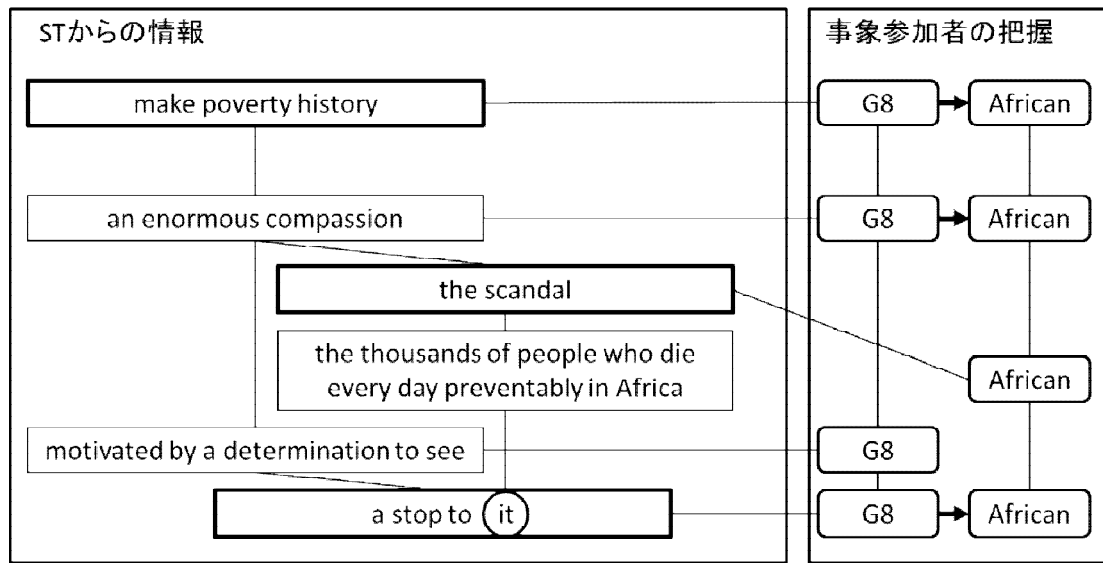
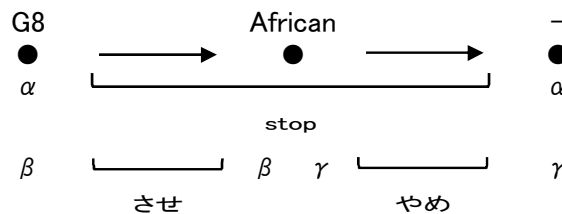


図1 STと参加者情報の関係

以上より、STの a stop to it (E019) に対する参加者として G8 から African が捉えられ、さらに前者から後者への力動性が把握されていたことを示せる。これにより、ST の stop (E019) の背後には G8 からアフリカの人々への力動性を含む因果連鎖があったと考えられ、TT の「やめさせ」という訳出は通訳者によるこの事象構造の把握を反映しているとみなせる。(13) では STと TT からうかがうことのできる事象構造の把握をまとめている。

(13)



この図において ST の stop の意味の範囲は、 α で挟んだ線分で表され、G8 からアフリカの人々への力動性とアフリカの人々が (死ぬことを) 終結させることの両方を示している。一方、TT の「やめさせ」は「やめ」と「させ」に分解され、それぞれ β で挟んだ線分と γ で挟んだ線分で因果連鎖の担当範囲を示している。この図で α の表す範囲は $\beta + \gamma$ の範囲と等しい。したがって、ST と TT は同じ事象構造を表現していると判断できる。この例では、使役的關係を明示する「やめさせ」に直接的に対応するのは stop という一語のみであり、ST ではこの語が表す事象の参加者も参加者間の関係も明示されていない。しかし、通訳者はディスコースの先行部分からの情報を文法的な構造とは異なるレベルで処理し、使役の事象構造の把握に活用している。このことから、こうした事象構造は、コード的な語の意味を文法規則に従い合成することにより得られる意味表示とは異なることがわかる。

4. 背景知識からの情報獲得とその他の考察

前節では、ST の対応箇所的事象参加者が明示されない場合でも、ディスコースの先行情報の活用により、使役的意味を表す事象と参加者の関係を含む事象構造が把握されうる例を分析した。この節では、ディスコースに含まれない情報が通訳者の認知資源により補充され事象構造が把握される例を分析し、その周辺に見つかる訳出に含まれる論点について、同じく TL の形態素「させ」を手がかりに考察する。

(15)

E 056 but it is never sufficient. In the end it is

J 056 いったことはありません。もちろん資金は必要です。しかし、それだけでもって十分で (は) ありません。

E 057 only vibrant African leadership, capable of giving good governance to its people, that can make the ultimate difference,

J 057 最終的にはアフリカの指導力、活力ある 指導力によってのみよき、統治を

E 058 that will root out corruption, that will entrench democracy and human rights

J 058 実現し、大きな変化をもたらすことができます。汚職をやめさせ、そして民主主義、

E 059 and will make sure that people respect the rule of law so

J 059 人権擁護を浸透させ、そして、人々が法による統治を尊重することを確実にするにはアフリカの人々の

E 060 I am very pleased at what we have been able to achieve and I hope, as I said to

J 060 指導力が必要です。大変今回のこの成果についてうれしく思っております。

(15) の TT では、J057 からいくつかの事象が並列的に扱われ、「汚職をやめさせ」(J058) と「民主主義、人権擁護を浸透させ」(J059) の 2 箇所です「させ」が使用されている。また ST の E059 では (1) で検討した make sure が使用されているが、この部分に対応する TT には「させ」の使用は見られない。これらを表 1 にまとめ、(a) から (c) とした。

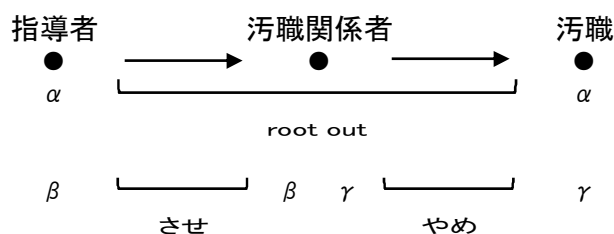
	ST	TT	動作主x	動作主y
a	that will root out corruption	汚職をやめさせ	指導者	汚職関係者
b	that will entrench democracy and human rights	民主主義、人権擁護を浸透させ	指導者	民主主義 人権擁護
c	will make sure that people respect the rule of law	人々が法による統治を尊重することを確実にする	指導者	一般市民

表 1 ST/TT の表現と動作主の対応

(a)、(b)、(c) はいずれも強調構文に使用された that 節の内容であり、TT は (a) の「汚職をやめさせ」の前でいったん発話の区切りが認められるが、ST では (a) を導く that はこの強調構文では並列する that の 3 番目であり、この箇所では発話は区切られていない。さらに capable of good governance to its people (E057) は that 節の内容ではなく、leadership (E057) を後置修飾する形容詞句であり、並列する that 節とは異なる統語的地位にあるが、TT では that 節の内容である他の事象と並列して処理されている。これは通訳者が表面的な統語構造を離れ、ディスコース内で表現される事象を言語表現とは異なるレベルで把握していることを反映していると考えられる。この capable of good governance to its people (E057) は「統治を実現し」(J57) と訳出され、最初の that 節である that can make the ultimate difference (E057) は「大きな変化をもたらすことができます」(J058) と訳出されており、共に「指導力」(J057) が動作主としてとらえられている。これは ST の統語構造を反映しており、意味的にも妥当な訳出と判断できる。また (a) から (c) の ST も強調構文の that の内容を示しており、すべて leadership を主語としている。この leadership が TT で並列的に処理されたすべての事象の動作主 x であると認められる。ここで leadership そのものは人物や集団の属性にすぎない。このディスコースで動作主としての地位にある leadership の具体的内容は「指導力を備えた指導者 (層)」と解釈できる。

(a) の that will root out corruption (E058) は、「汚職をやめさせ」(J058) と訳出されており「させ」が使用されている。ここで汚職をやめる動作主 y となるのは、政治家や政治家に利権を要求する人々など汚職に関わる人々であり、この訳出のために把握された因果連鎖は (16) として表示できる。

(16)

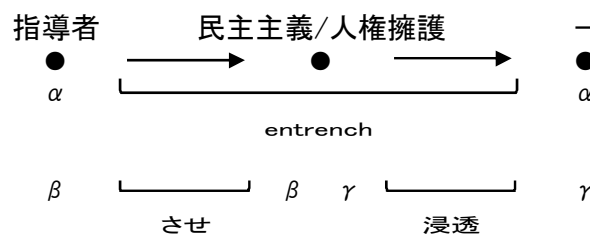


ST の root out (E058) は leadership (E057) と corruption (E058) との関係を示しており、(16) では因果連鎖において root out によって表される範囲を 2 つの α で挟まれた線分で示した。しかし、TT の「やめさせ」の前提となる汚職関係者に相当する実体を示す表現は ST のどこにも見つからない。前節の (11) で分析した stop の例でも、TT 表現に対応する ST 表現には事象の参加者は明示されていなかったが、参加者の候補となる実体は先行ディスコースの内部に見つけることができた。つまり、通訳者は先行ディスコースにおいて現れた実体を、それが出現した個所で処理したのみならず、その後もその実体の保持を継続し、後続する ST の処理にも活用していた。ところが、表 1 の (a) の訳出では corruption の表す事象の参加者はこの箇所の訳出に対応する ST 表現に明示されていないだけでなく、

ST のどこにも表れていない。しかし、この「させ」の訳出は **corruption** に関わる実体の想定なしでは説明できない⁴。通訳者は「汚職」に関する状況を把握し、そこに含まれていた「汚職関係者」を取り出し、**stop** という表現を土台に把握された事象構造の動作主 y として組み込んだのである。この「汚職関係者」という実体を **corruption** の語彙に含まれる意味の一部として主張することは困難であろう。ましてや、こうして得た実体を事象の参加者として位置付け因果連鎖に組み込むことはコード的な言語処理では不可能である。この情報は政治的汚職に関する通訳者の百科事典知識から引き出されたものであり、この情報取得は **corruption** の意味に伴う関連状況へのアクセスを前提とする。この「汚職関係者」という実体に関する情報の獲得とこうした情報の意味構築への活用を、LCCM 理論 (Evans 2009) では、語彙概念から認知モデルへのアクセスの結果として説明する。ここでの「させ」の前提となる (16) の事象構造を把握するには、こうした認知資源へのアクセスが必要となる。

次に (b) の **that will entrench democracy and human rights (E058)** は「民主主義、人権擁護を浸透させ」(J058) と訳出されている。ここで「浸透」するのは「民主主義、人権擁護」であり、その状態をもたらすのが「指導者」であるから、「指導者」が「民主主義、人権擁護」という抽象的な実体に働きかけ、「民主主義、人権擁護」が「浸透」するという因果連鎖が想定される。この事象構造は (17) として表示できる。

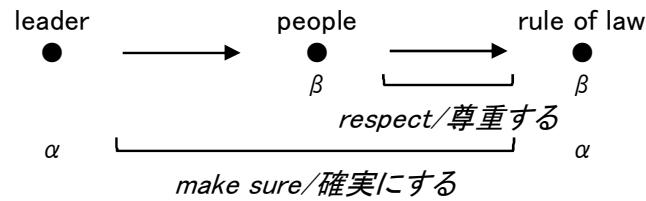
(17)



これは ST 表現の字義的意味から表示できる事象構造と同一であり、ここでの「させ」は、**entrench** の語意に含まれる他動性の表出として説明することもでき、これは ST と TT の差異とは見なせない。しかし、「浸透させ」を **entrench** の一般的な辞書的意味ということとはできず、代わりに「確立し」という訳出を採用することもできたはずである。ここでは内容語の選択の問題については議論しないが、少なくとも「させ」という訳出が表れている以上、通訳者は (17) の事象構造を把握していたと見なせる。

最後の (c) について、**will make sure that people respect the rule of law (E059)** によって示される事象構造を分析すると、**leader** を **people** に働きかける動作主 x とし、**people** を **rule of law** に向かう事象の始点としてとらえることができるため、この事象構造は (18) で表示することができる。

(18)



これは「人々が法による統治を尊重することを確実にする」(J059) と訳出されており、「尊重する」と「確実にする」の表現は、それぞれ *respect* と *make sure* の示す矢印と重なる。この *make sure* の事象構造は (1) の *make sure* の例と同型であり、「させ」の使用が可能となる条件を満たしている。ここでの訳出は「させ」を使用していないが、直前の (b) では ST でも明示的な使役表現が使用されており、その前の (a) では明らかに ST に含まれない情報を補充し使役的事象構造をとらえた訳出がなされていることから、これらの処理に連続するこの訳出も同様の事象構造を基盤としていたと考えたい。では、なぜここで「させ」が使用されなかったのかという点に関して、次の 2 点があげられる。第一に形式的側面として、*respect* (E059) の主語である *people* (E059) を「人々が」と訳出したことで、この表現が「させ」と共起できなくなったという事情を指摘できる。この場合、ST で使役的意味が非明示的であったのと同様に、TT でも非明示的に使役的意味が含意されていると言える。第二に意味的側面として、「尊重させ」という訳語を選択した場合、「現状では法による統治が全くなされていない」という意味合いが強くなるという事情がある。このように個々の訳出においては、さまざまな要因が介入するため、同一の構造を持つ SL 表現に対する TL 表現の多様性もたらされると考えられる。しかし、こうした多様性にも関わらず、訳出に大きな逸脱が生じないのは、通訳者が SL 表現と TL 表現のパターン化された対応によって訳語を選択しているのではなく、事象構造の把握に基づき訳出を行っていることによると考えられる。

(a) から (c) を順に訳出した後で、通訳者は「アフリカの人々の指導力が必要です」(J059) と訳出している。これに対応する ST の表現は E057 の *vibrant African leadership* であるが、これは J057 で「アフリカの指導力、活力ある指導力」として、いったん訳出されている。つまり、ここで通訳者は ST には一度しか現れていない表現を、いったん TT に訳出したのち、かなり遅れて再度訳出している。この繰り返しの訳出は、通訳者がこの「指導力」に対応する要素を保持していたことの表れであり、この長期の心的保持は「指導力」が並列的に言及される事象の動作主として常に認識されていたことを表しており、通訳者による事象構造把握の傍証ともなる。

5. 事象構造の性質

ここでは本稿の分析により示唆される事象構造の性質について考察する。

通訳者が把握する使役の事象構造は、オンラインの発話理解の結果として生まれる意味表示の一部であり、安定的かつ抽象的な言語知識とは区別される。通訳者は Croft (1990, 1991) が因果連鎖図として示した構造を事象理解のためのスキーマ的知識として備えており、これを発話理解のための認知的資源として使用すると思われるが、本稿の分析で明らかになったとおり、発話理解において把握される事象構造は語のコードの意味の合成によってとらえられるわけではない。より一般的には、こうした構造の把握は、ディスコースの内外を問わず、文脈情報からとらえた実体を事象の参加者として捉え、因果連鎖のスキーマに埋め込むことにより実現する。この事象構造は、発話には含まれない情報を含み、発話の統語構造とは異なる構造を備えているため、発話の言語表示とは異なるレベルでの心的表象であると考えられる⁵。こうした事象構造は、スキーマやプロトタイプのような認知資源を利用しながらも、発話理解に先立ち存在する一定不変の知識構造ではなく、オンラインで構築される心的表象であるという点で、Johnson-Laird (1983) の主張するメンタルモデル、Kintsch (1998) の主張する状況モデル、船山 (2006)、船山ほか (2005, 2008) および Funayama (2007) の主張する概念的複合体と共通する性質を持つ。

事象構造を把握するために必要な情報が発話に含まれない場合、関連性の原則 (Sperber and Wilson 1986/1995) に則り、拡充されたものと考えられる。関連性理論では、情報拡充の結果として表意あるいは推意と呼ばれる想定が構築されると主張されるが、本稿では発話理解の認知的処理の結果、直ちにこうした想定が言語的構造を持つ命題として構築されるとは想定せず、命題構築に必要な情報を構造的に備えた心的表象が関連性の原則に従い構築されるという立場をとる。そして、非言語的な心的表象である事象構造を踏まえて表示形式が選択される。

「させ」の使用を可能とする使役の事象構造を把握するための必要条件として (10) の 3 つの条件を示したが、通訳者がオンラインのディスコース処理に際し、これらの条件を逐一吟味するという演算を現実的な認知処理として主張することには無理がある。実際には、発話の聞き手としての通訳者は、(10) の条件が満たされたことも、因果連鎖によって表示できる事象構造が構築されたことも意識しないだろう。Johnson-Laird (1983) は、世界の構造を反映する心的表象としてメンタルモデルを理論化し、ディスコースの解釈はメンタルモデルそのものと、そのモデルの形成、拡張、評価の過程の両方がかかると主張している。事象構造の把握は意味構築そのものの一部であるが、通常、発話の聞き手がその過程を意識することはない。ただし、把握した事象構造をもとに自らが理解している内容を検証することはできると考えられる。たとえば、(3) で示した訳例の適否の判断は、このような心的表象の検証によってなされるものであろう。Croft (1990: 50) も因果連鎖の特色として、論理計算ではなく幾何学的表示であることをあげており、本稿での主張の通り、こうした因果連鎖が発話理解における心的表象として機能するならば、この特色に基づく推論は Johnson-Laird (1983) の主張する心理学的に妥当な推論の仕組みと整合性を持つ。

6. むすび

通訳者は、原発話者の心に直接的にアクセスすることはできないため、ST で意図される伝達内容を一挙に把握することはできない。通訳者は ST 表現を手がかりに段階を経て、まとまりのある概念に到達する。(1) でみた「途上国において」という訳出は、こうしたオンラインのディスコース処理の実態を示す実証的な資料である。この訳出はときに判断を確定できないまま情報の訳出を迫られる同時通訳作業の性質からもたらされた処理である。構築の途上にある未成熟な概念に基づき発話を行うという状況は同時通訳に特有のものであるが、ここから分析される発話理解のあり方は同時通訳者の特殊な認知活動ではない。すなわち、一般の発話理解においても、聞き手が話し手の意図する事象を理解する際には、こうしたオンラインのディスコース処理を実行し、事象構造を把握するものと考えられる。

本稿では、同時通訳データの分析から、ディスコース処理のためにある程度の長期にわたり保持される事象構造が同時通訳の訳出に貢献していることを確認した。SL の発話理解に際し、通訳者は必ずしも ST に明示的な情報のみを使用するのではなく、当座の訳出の対象となる ST に含まれる言語情報に加え、ディスコースの先行部分や百科事典的知識から必要な情報を補充したうえで事象構造を把握し訳出に活用している。ここで分析した使役的事象構造はその一例であり、文脈や背景知識が事象構造の把握において果たす役割を具体的に示すことができた。使役的意味は、統合事象における動作主の関係を含む事象構造を把握することで得られる。逆にある事象がこの条件を満たすものとして把握されれば、この事象を使役的表現で表すことが可能となる。こうした事象構造は発話理解において構築される概念の骨格をなすものと考えられる。

また本稿は、ST と TT の対照分析により認知言語学での研究成果をディスコース処理の分析に応用可能であること、さらに通訳研究ならではの実証的分析が一般の発話理解研究の一助となる可能性をもつことを示している。

.....

【謝辞】

本研究のためご指導を頂いた神戸市外国語大学船山仲他教授に心からの謝意を表します。

【著者紹介】

石塚浩之 (ISHIZUKA Hiroyuki) 神戸市外国語大学大学院・外国語学研究科博士課程在籍。

【註】

1. 本稿で扱った分析に関連する記述として、Setton (1999: 181) には、独英同時通訳において ST の *Rechtsprechung* (法体系) が動作主、述語、主題などの情報を引き出した例の簡単な紹介がある。

2. 分析資料は、2005年7月8日のブレア英首相(当時)のスピーチとその通訳事例(放映:NHK BS-1「きょうの世界」)であり、ST、TTの記録データは、書きおこし原稿として『同時通訳における概念化過程の検証 平成17-19年度科学研究費補助金研究成果報告書(課題番号17520272)』に収録されている。(資料番号R-6)この報告書には、発話理解研究の生データとして同時通訳記録を使用する場合の注意点として、(a)原稿や予行のないぶっつけ本番の同時通訳であること、(b)通訳者の能力を把握せねばならないこと、(c)標準的な同時通訳を採用すること、(d)訳出の正当な評価の確保に努めること、の4点が挙げられている。本稿で使用した例は、これらの基準のすべてを満たし、研究の目的に合うものを採用した。
3. ST表現からは have the capacity to make use of (E049) は can use と言い換えられるため、we (E048)、those developing countries (E049)、those more open markets (E049)の関係から事象と参加者の関係を考えることもできるだろう。しかし、通訳者の発話理解のためにはTTの表現を手がかりとすべきであり、この訳出では「能力を身に付け」(J049)という表現が使用されていることから、通訳者の事象の把握においては「能力」が抽象的実体として参加者の地位を担っているものと判断する。
4. ここで通訳者は corruption を「汚職」と訳出しているが、そもそも corruption は常に政治的汚職を意味するわけではなく、ここでは文脈情報を利用した多義性の一義化が行われている。
5. Croft (1990, 1991) の因果連鎖は動詞の意味を分析するための表示であり、言語表現とは不可分のものとして扱われている。しかし、これは人間の認知能力に支えられた概念であり、言語が人間の事象に関する一般的なとらえ方を図式化したものならば、そうした構造を心的表象として構築可能とするスキーマは、言語表現から独立し、言語以前に存在していなければならない。発話理解に際しては、言語表現によってこのスキーマが活性化され、これに具体的な事象とその参加者を埋め込むことで、心的表象としての事象構造が構築されるものと考えられる。

【引用文献】

- Croft, W. (1990). Possible verbs and the structure of events. In Tsohatzidis, S. L. (ed.), *Meanings and Prototypes: Studies on Linguistic Categorization*, 48-73. London: Routledge.
- Croft, W. (1991). *Syntactic Categories and Grammatical Relations: the Cognitive Organization of Information*, Chicago: University of Chicago Press.
- Evans, V. (2009). *How Words Mean*. Oxford: Oxford University Press.
- Fillmore, C. J. (1982/2006). Frame Semantics. Originally in Linguistic Society of Korea (ed.) *Linguistics in the Morning Calm*, 111-137. Hanshin Publishing Company, Seoul. Reprinted in Geeraerts, D (ed.), *Cognitive Linguistics: Basic Readings*, 373-399. Berlins/New York: Mouton de Gruyter.
- Funayama, C. (2007). Enhancing Mental Process in Simultaneous Interpreting Training, *The Interpreter and Translator Trainer*, 1(1): 97-116.

- Johnson-Laird, P. N. (1983). *Mental Models*. MA: Harvard University Press.
- Kintsch, W. (1998). *Comprehension*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Pöschhacker, F. (1993). From Knowledge to Text: Coherence in Simultaneous Interpreting.
In Gambier, Y. and Tammola, J. (eds.) *Translation and Knowledge: SSOTT IV*, 87-100. Turku: University of Turku, Centre for Translation and Interpreting.
- Setton, R. (1999). *Simultaneous Interpretation: A Cognitive-Pragmatic Analysis*, Amsterdam: John Benjamins.
- Sperber, D. and Wilson, D. (1986/1995). *Relevance: Communication and Cognition*, Second Edition, Oxford: Blackwell.
- Talmy, L. (2000). *Toward a Cognitive Semantics*, vol. 1: *Concept Structuring Systems*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 石塚浩之 (2009) 「発話理解における事象構造と視点」『外大論叢』60, 81-103. 神戸市外国語大学
- 大堀壽夫 (2002) 『認知言語学』東京大学出版会
- 船山仲他 (2006) 「発話理解のオンライン概念表示」『外大論叢』57, 1-22. 神戸市外国語大学
- 船山仲他ほか (編) (2005) 『同時通訳データに基づく言語過程のマイクロ分析: 平成 15-16 年度科学研究費補助金 (基盤研究 (C) (2)) 研究成果報告書 (課題番号 15520262) 』神戸市外国語大学外国語学部
- 船山仲他ほか (編) (2008) 『同時通訳における概念化過程の検証 平成 17-19 年度科学研究費補助金 (基盤研究 (C) (2)) 研究成果報告書 (課題番号 17520272) 』神戸市外国語大学外国語学部